

桃山陵墓地内竹根防止工事に伴う立会調査

桃山陵墓地は約90万㎡の敷地内に明治天皇伏見桃山陵と昭憲皇太后伏見桃山東陵、および桓武天皇柏原陵の3陵が営まれている（第20図）。よく知られているとおり桃山陵墓地は豊臣秀吉によって築城された伏見城をほぼすべて取り込んでおり、現在でも城郭当時の縄張りを垣間見ることができる。

さて、この桃山陵墓地は兆域外のほとんどが雑木林、あるいは竹林となっているが、今回の工事はその竹林が拡散することを防ぐために、竹根防止シートを埋設するものである。施工箇所は第20図に示したA～H地点の8箇所を実施し、施工総延長は1,162mを測る。掘削は幅、深さともに50cmほどを重機によって掘削したものであり、立会調査は掘削箇所の写真撮影・主要部分の土層断面図作成を行いながら、遺構・遺物の有無を確認した。結果的には遺構は出土しなかったが、8箇所のうち2箇所から瓦などが出土したので、報告しておく。

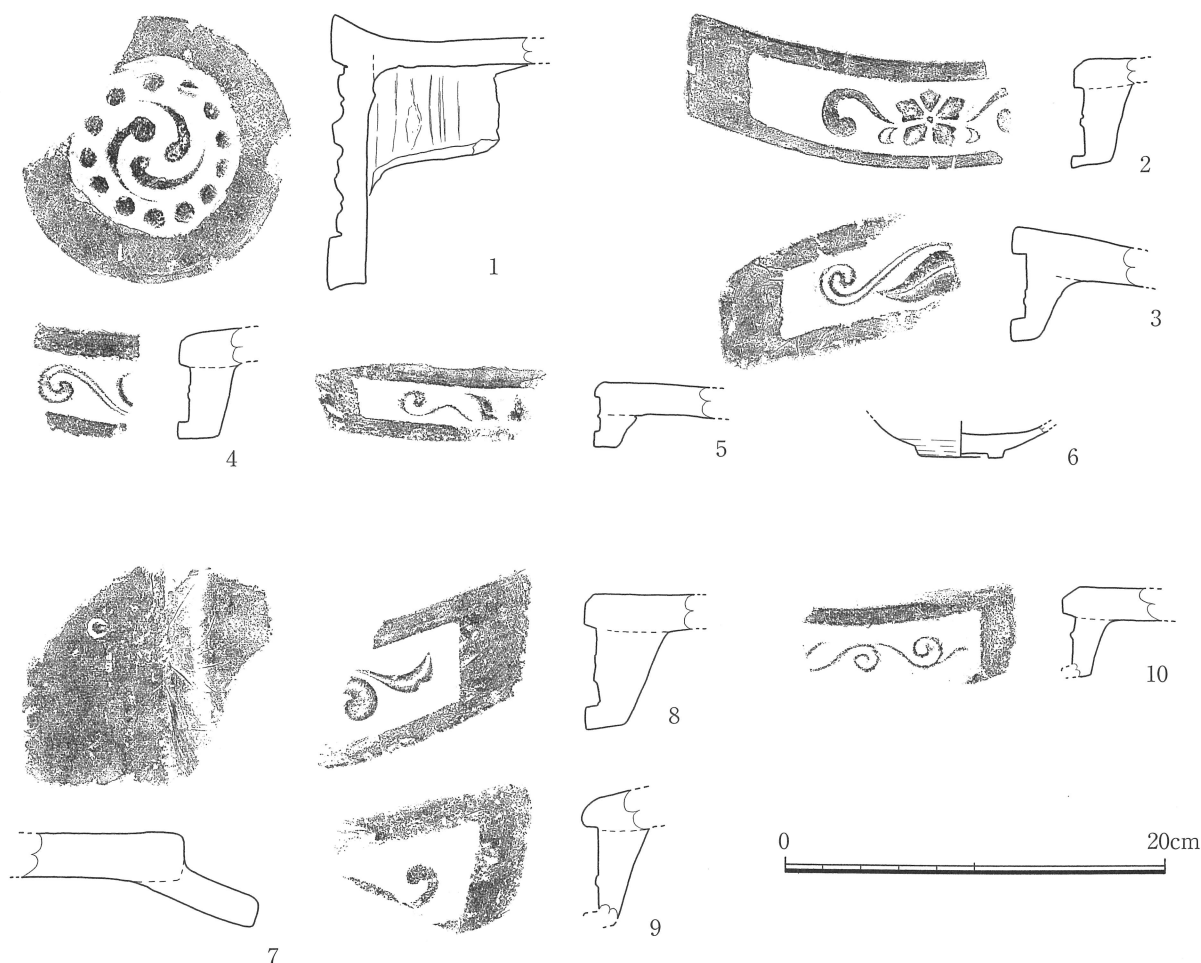
なお、現地の調査にあたっては京都市文化財保護課馬瀬智光氏にご指導を賜り、出土した瓦類については京都府埋蔵文化財センター森島康雄氏にご教示賜った。冒頭に記して、感謝申し上げる次第である。

出土した瓦等は第21図に示したとおりであるが、このうち1～6はC地点で出土したものであり、7～10はF地点で出土した。出土した地点について、これまでに公表されている伏見城の縄張り図によれば（註1）、C地点は名護屋丸にあたり、F地点は二の丸に相当する。

続いて順に出土品を見ていくこととするが、1は巴文の瓦当文様を持つ軒丸瓦である。縁が薄く、直径も



第20図 桃山陵墓地 調査箇所位置図 (1/10,000)



第21図 桃山陵墓地 出土品実測図 (1/4)

やや小さいことから主要建物に使用されていたとは考えられない。縁の薄さなどの共通点から5に示した軒平瓦とセットになる可能性がある。続いて2・3が金箔瓦である。2は中央文様に桔梗をあしらった両側に唐草文が配される。現状では金箔そのものはほとんど残っていないが、接着剤として塗布された漆が残っている。3は葉紋と唐草文が観察できるが、通常の平瓦とは逆の反りを呈している。よって軒平瓦ではなく、棟に使用する瓦であると考えられる。F地点出土の8・9も、これらの金箔平瓦と同様な文様の特徴を持つ。現在は漆も確認されないが、同様の瓦になる可能性もあろう。これらの金箔瓦は、秀吉が築城した伏見城の特徴をよく示していると思われる。10の軒平瓦は唐草文様が細い線によって表現されており、先述した金箔瓦よりはやや古い特徴を示すことから、あるいは再利用の瓦であることも考えられよう。7は丸瓦の基部であるが、2次焼成を受けたためか黄白色を呈する。この瓦が出土したF地点からは、ほんのわずかではあるが焼土が検出されており、あるいは二の丸が焼失した際に2次焼成を受けた可能性も考えられる。6は唯一出土した陶器であるが、砂目唐津の皿であると思われる、17世紀の初頭に位置付けられる資料であろう。

以上、今回の工事で出土した瓦類を中心に報告してきた。今回出土した瓦には、文禄期以降の特徴を示す瓦当文様を観察することができ、当該期の金箔瓦資料との比較研究に有用な資料であろう。

今後も同様の工事が施工される可能性があるが、引き続き遺構・遺物の出土に注意していきたい。

(徳田誠志)

註

(1) 加藤次郎『伏見桃山の文化史』、1953年。